

藤原顕季の和歌と今様

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 大野 順子

藤原顕季(一〇五五―一一二三)は、和歌の家である六条藤家の祖であることや、人麿影供を創始した人物であることで著名である。また、『郁芳門院根合』や『堀河百首』などに出詠し、永久年間以降はいくつもの歌合で判者をつとめたことなどからも、この期の歌壇の重鎮であったことがわかる。

このように歌人として重きをなす位置にあった一方で、母親の親子が白河院の乳母であった関係から、顕季は院の近臣としての一面も持っている。

当時、院北面ではさまざまな芸能が盛んに行われており、そのひとつが今様であった。記録の上で、顕季自身が今様を歌ったかどうかまでは確認できないが、『梁塵秘抄口伝集』の今様談義の場にその名が見えることから、少なくともバトロンのな立場で遊女や今様と関わっていたと推測できる。井上宗雄氏に、顕季は和歌以外の「諸芸に興味を有して或る域にまで達し、随時子孫に伝えることに関心があったらしい」との指摘がすでにある。そうであるならば、顕季は、院北面において盛りあがりを見せていた今様についても、子孫に伝えるために一定以上の知識を持ちあわせていたと考えるのが自然であろう。

顕季の和歌を丹念に見ていくと、顕季が和歌に用いた表現・発想には今様との近接が見られる他、語の用法において歌謡的側面が見られることが確認できた。顕季の和歌といえは、これまでは『万葉集』に特有の語彙を取り入れることが盛んであるといった、万葉歌との繋がりを強調するような指摘が多かったのだが、一方で、今様のように当時の流行の最先端とも

言うべきものをも取り入れてもいたということは注目されてよいのではなからうか。しかし、こういった和歌と今様との交流は顕季のみに見られるものではなく、顕季に近い位置にいる歌人にも同様の傾向が認められた。そしてこれは、今様好きが多数存在した白河院周辺の歌人全般に指摘できる傾向でもあった。

このような傾向は、前代までは今様が和歌を一方的に取り入れることに終始していたのに対し、貴族自身が歌い手となったことで流行歌謡でしかなかった今様が教養の周辺領域に定位され、やがて和歌の発想の源泉となりうるものとなっていったため起こったと思われる。これを証明するよう、同様の傾向は新古今歌人らにまで引き継がれていったのだが、本稿はその端緒とも言える時代の実作の有り様を顕季歌を中心に据えて確認したものである。

キーワード・藤原顕季 今様 梁塵秘抄 院政期和歌 白河院

- 一. はじめに
- 二. 顕季と俊頼の消息文
- 三. 顕季歌と今様
- 四. 院政期和歌と今様——結びにかえて

一・はじめに

藤原顕季といえ、和歌史上で初めて「人麿影供」を行った人物であること、和歌の家である六条藤家の祖であることなどが、まずあげられよう。歌人としての活動は生涯を通じて活発であり、製作年次のはっきりしているものだけを考えても、承暦元年（一〇七七）の『讃岐守顕季家歌合』から保安二年（一一二二）閏五月二十六日の『長実家歌合』まではほぼ切れ目なく作品が見られる。その間には『堀河百首』・『郁芳門院根合』・『堀河院艶書合』など晴れの歌会に多く参加しており、顕季が歌人として一定以上の評価を受けていたことがわかる。さらに、長治二年（一一〇五）以降になると判者としても歌合に関わるようになっており、この点から言っても歌壇での顕季の地位の上昇のほどが察せられる。

ただし、顕季の歌壇における地位は、純粹に歌人としての力量だけでなく、政治的側面も加味する必要がある。井上宗雄氏をはじめとする諸氏によって指摘されていることである⁽¹⁾が、顕季は母親の親子が白河院の乳母であった関係から院に重用されて大國の国司を歴任し、ついには正三位に昇って修理大夫と大宰大式を兼ねたというように、絶大な権勢と富とを得ていた。そのような社会的地位の高さが、歌壇での立ち位置に一役買っていたのは言うまでもない。

それでは、今回の表題にもあげている今様と顕季との関わりはというと、『梁塵秘抄口伝集』の一節から何うことができる。

そののち、乙前に、ある人問ひていふ。「異歌は、大曲の様はいと変らぬに、旧河むげに似ぬ。いかに。他人のこの様にうたふは、ひとりもなし」と問ふ。乙前、目井申し候しは、「何れの時などは申し得ず。人々あつまりて、やうやうの歌談義して、大曲みな尽して沙汰せし時、目井が旧河の様をうたひしを聞きて、敦家・敦兼、またあまた人々聞きて、『旧河は、風俗の様にこそ、みなうたひあ

ひためれ。これは珍しくて、めでたきものかな』とて、両三反うたはせて、『この様つねになし。秘蔵してつねにはうたふまじ』と人々いひければ、この様をば、のちにはうたはざりけり。修理大夫顕季、樋爪にて、墨俣・青墓の君どもあまたよびあつめて、やうやうの歌を尽しけるに、目井、この様の旧河を出だしてけり。乙前やがて付けて歌ひけるを、清経、「めでたき節かな。つねの節にも似ぬさまにこそ。この様をば人々え付けられじものを」といひけるに、人々まことに知ざりけり。大進もしらざりければ、え付けで止みにけり

（梁塵秘抄口伝集 卷第十⁽²⁾）

右の点線部によれば、顕季は桂川下流の樋爪にある邸に墨俣や青墓の遊女たちを集め、さまざまな今様を歌わせていた⁽³⁾。

管見によれば、記録上で顕季と今様の関わりが述べられているのはこのみであり、この一例をもって今様との関連を語るのは如何と思われるかもしれない。しかしながら、顕季主催の宴で目井が歌った今様の歌い方は、敦家・敦兼という貴族方の今様の上手が「珍しくめでたきもの」と称讚し、秘蔵して常は歌わぬようにと命じたものであった。その命令を長らく守ってきたにも拘わらず、目井がついにこの場で披露したというのは、言い換えれば、とっておきの曲を歌わなければならぬほど、この宴は遊女たちにとって重要な場であり、主催者の顕季にはその重さを理解できる素養があつたということである。

また、顕季を重用した白河院は、院北面にお気に入りの近臣を集めて、しばしば今様を歌わせていた⁽⁴⁾。顕季は歌い手としての才能はさほどではなかったのか、院の御前で歌つたという記録は見られない。しかし、生涯を院の傍近くで過ごした顕季であれば、今様は当然のことながらごく身近なものであつただろう。

白河院時代の歌人と今様については、幾人かの和歌に歌謡的な影響が

見られることがすでに報告されている⁽⁵⁾。しかし、顕季に関しては和歌の分析はなされているものの⁽⁶⁾、そこに歌謡的な面が見られるか否かについては殆ど論じられていない。そこで本稿では、顕季の和歌と今様との影響関係について考察していく。

二・ 顕季と俊頼の消息文

さきのもくのかみとしよりの君いせにくだりてのちひさしくおともせざりしにかくなんいひおこせたりし

ひなのわかれによろづおとろへはてて、おぼつかなきおほよどのつねにもせさせたまふちふねのよるひるは、なみの心にかけながら月日のすぎにけることも、なげきのもりのとき葉なるうへにたきぎをつめるうれへはみにそへるかげのごとくにして、すずかのせきにもふりすてられず、しぶく山をもすべらかにこえにければ、竹のみやこにたびねをしてよよのふることをさへおもひつづくれば、さもあはれなりけるみのありさまをもてあつかひてしらぬさかひにもまどひけるかな、と袖のしがらみ所せきままには、ただはまをぎのをりふしごとにはなほよきさまのつらにかずまへさせたまへかし、と人しれずあふがれて、おもひいでもなきみやこなれど、ささがにのいとひさしくかきたえぬるはころほそかりけることなれば、くずのうら葉のかぜになびくもめにとどまりて、さりとてやはとていそぎたつをききて、のなたつしかのとまうさする人もなきにはあらねば、いでやいづこにもつひのすみかならねば、つりするあまのときだめかねてやすらはるるほどに、のこりすくなきみのありさまは、たびのそらよはのけぶりともたちのぼりなば、あまのいさりびかとおぼめかれんこともおのづからあはれとばかりやつたへき

かせたまはん、とみづくぎのあとかきながされぬままには、これにもつきぬ心地するいぶせさもただおしはからせたまふべしとへかしなたまぐしの葉にみかくれてもずのくさぐきめちならずとも

とありしかばかくなん

つかひのただいまくだればととくととせむるになに事もおもひもあへぬほどにてすなはち、ちはやぶる神なづきのついたちのひなむいろのことは見たまへはべりぬる、まことにみなづきのいとひさしくもきこえさせではべりけるかな、はなのみやこをふりすてて、すずかやまこえさせたまひしに、さりとともとしぶくやまのなをたのみおもたまへしかど、かひなくなのみしてすぎたまひにけりとうけたまはりて、くちをしくてすぎはべりしかど、つひにはいせのうみのなみたちかへりたまはざらめや、その時こそはほしあひのはまのまさごのかずをつくしておぼつかなかりしほどのことをもきこえさせめ、ひなかのはまのほどばかりだにもたいめんせでやは、とむらまつのはまをたのみてすぎはべるほどにあはせても、たれそのもりのたれも、いくりの人をきくこともふぢかたのかたくて、なにごともしはきのことにてのみなん、うきはしのおろかなるさまにおもはれたてまつりぬるかな

しらずやはいせのはまをぎかせふけばをりふしごとに恋ひわたるとは
(六条修理大夫集 三三三八・三三三九⁽⁷⁾)

右の贈答歌の詞書は、伊勢に下った源俊頼の消息と、それに対する顕季の返信である。

ところで俊頼は、その家系や彼自身の和歌作品から今様との交渉をすでに指摘されている歌人である⁽⁸⁾。一方、顕季は先に述べたように遊

女を集めた宴を催している。そこで、俊頼と顕季の知識の共有基盤の一翼を担うものとして今様をあげられるのではないかと考えて二人のやり取りを探ったところ、右の消息に、今様との関連を思わせる語句が幾つか見られた。その一つが、点線で示した「鈴鹿山」から「しぶく山」へと続く流れである。

顕季の消息に見え、『梁塵秘抄』でも歌われている「しぶく山」について、新全集はいずれの地名であるか未詳とし、さらに「しづく山」と読みかえて『能因歌枕』の常陸の国の名所をあてる説を紹介している⁽⁹⁾。しかし、「ぶ」を「づ」とおきかえて東国の地名をあてるというようなことをせず、そのまま「しぶく山」としても良いのではなからうか。

山の様かるは 雨山守る山しぶく山 鳴らねど鈴鹿山 播磨の明石
の此方なる 塩垂山こそ様かる山なれ (梁塵秘抄 四三〇)

「山の様かるは」として歌われている山の名は、「あめ」「もる」「しぶく」「しほたれ」と水の縁語が連ねられている⁽¹⁰⁾。そこへ唐突に「鈴鹿山」という地名が入ってくるのは、おそらく「雨山」「もる山」「しぶく山」と近江・伊勢あたりの山⁽¹¹⁾の名を連ねていったときに、水の縁としての「しぶく山」ではなく実在の伊勢の地名として認識し、伊勢と近江とを繋ぐ関の名として「鈴鹿」の関を想起したためであろう。

しぶく山にて

あらしふく山したとよみなく鹿のつまこふるねに我ぞわびしき

(兼輔集 九二)

洪久山

波のうつつおとのみとほしおぼつかなたれにとはまししぶく山かぜ

(歌枕名寄 伊勢国下 四七七八)

「しぶく山」は和歌ではほとんど使用されることのなかった語であり、作例として上げられるは右の二首のみである。

『兼輔集』九一番は、詞書に「しぶく山にて」とあるが、歌自体は隠題として詠まれていることもあり、いずれの国の地名を詠んだものかはつきりしない。しかし、続く『歌枕名寄』四七七八番の「しぶく山」の場合、同書の成立が嘉元元年(一一三〇三)頃であるためだいたい時代は下るが、「伊勢国下」の中に入れられている。

このように伊勢国の地名とされることは、消息文で俊頼が「すずかのせきにもふりすてられず、しぶく山をもすべらかにこえにければ」と述べ、それに対して顕季が「すずかやまこえさせたまひしに、さりともしぶくやまのなをたのみおもたまへしかど、かひなくのみしてすぎたまひにけり」として、京都から伊勢への旅の途中、鈴鹿山を越えた先に「しぶく山」があるように表現している点と合致する。

無論、俊頼と顕季の消息に「しぶく山」と「鈴鹿山」とが出てきたことについて、俊頼の場合は伊勢に下るまでの実景を用いていることであり、顕季はそれを受けて反復しただけであって、今様との関わりはなかったとも考えられる。しかし、今様が盛んであった時代の消息に、今様以外の文学作品にほとんど用いられることのなかった地名が出てくるというのは、やはり注目されて良いように思う。

続いて、「花の都を振り捨てて」について見ていく。

関路帰雁

をしむべき花のみやこをふりすててすずかのせきをかへるかりがね

(為忠家初度百首 八三 為忠)

越前の守にてくだりしに、思ひのほかにめづらかなる人をみだして

是やこの花のみやこをふりすてて行きとまりけるこしのさと人

(隆信集 五八九)

さきいづる花の都をふりすててかぜふく原のすゑぞあやふき

(平家物語覚一本 三五／源平盛衰記 卷一六 九四)

「花の都」という語は『後拾遺集』あたりから急に用例が増えはじめる⁽¹²⁾のであるが、単に「花の都」ではなく「花の都を捨てる」という表現になると途端に用例を減じ、ここにあげたものではほぼ全てとなる。貴族にとって心の拠り所となるべき都を、自ら見捨てるという表現は、やはり発想としてなかなか出てこなかったのだろうか。

では、何故ここで顕季は「はなのみやこをふりすてて」と表現したのか。

「花の都」という語は、俊頼が消息で伊勢を指して「竹のみやこ」と書いたことから想起されたと考えられ、このことと、俊頼が「すずかのせきにもふりすてられず」と記した部分とが結び合わされて「花の都をふりすてて」と書かれたという推測も可能だ。しかし、顕季が表現したのは、ひとり都にある顕季自身の立ち位置を強調するとともに、『梁塵秘抄』二六〇番の解釈が関わってくるように思われるのである。

花の都をふり捨てて くれくれ参るはおぼろけか かつは権現御覧

ぜよ 青蓮の眼を鮮やかに (梁塵秘抄 二六〇)

右の今様は、「くれくれ」を「心が暗く沈んで悲しみに暮れるさま」とするか「繰り返し行うさま」を示す語とするかで若干の意味の相違は

出るものの、花の都を捨ててまで参詣する信仰の深さを見て欲しいと権現に訴える今様であることに変わりはない。熊野と伊勢と目的地は異なるが、今様の言葉を借りることで、花の都を離れる悲しみを堪えて神のおわず地へと下向していった俊頼を賞賛し慰める気持ちながこめられていたのではなからうか。

今様それぞれの成立時期を定めることが難しく、ここで取り上げた『梁塵秘抄』二六〇番も顕季の歌に先行して流布していたものであると断言はできない。しかし、顕季の消息には「ちはやぶる神なづき」、「はまのまさごのかず」や「うきはし」など、既存の和歌の句が様々に取り込まれている⁽¹³⁾。それらと同じく、「花の都をふり捨てて」という当時の和歌には珍しかった詞章が、既存の今様から取り入れられた可能性は残されて良いように思う。

以上、顕季の消息文の中に今様との交流の跡を見てきた。しかしながら、この贈答歌の例だけでは、俊頼から影響を受けた一回的なものとも考えられる。そこで次節では、顕季の和歌と今様の影響関係について見ていく。

三、顕季歌と今様

本節では、顕季が用いている歌語と今様の詞章の近接について見ていくが、顕季歌の大部分を収める『六条修理大夫集』を精査していくと、次のような作例があげられる。

【例1】

なみかくるきしのひたひのそなれ木のそなれていもとぬるよしもがな

(六条修理大夫集 恋 一一三)

水馴木の 水馴磯馴れて別れなば 恋しからんずらむものをや
睦れ馴らひて (梁塵秘抄 四六五)

としわかきをとこの、われにまさりたる人の女を思ひかけ
て、かかる人ありとしらせむ、さやうにいひつべき事とせ
めしかば、はなれぬ人とききて

みなれきにしほやくあまのほどよりはけぶりのたかきものをこ
そ思へ (相模集 一六三)

みなれぎの見なれそなれてはなれなばこひしからんやこひしから
じや (源氏釈 八一)

そなれ木のそなれそなれてふす苔のまほならずともあひみてし
かな (千載和歌集 恋歌三 八〇四 待賢門院安芸ノ
久安百首 一二六三)

風ふけばなみこすいそのそなれまつ根にあらはれてなきぬべら
なり (古今和歌六帖 まつ 四一一三 人丸)

撰政殿下にて、人人に十首歌よませさせ給ひけるに、桜を
よめる

をちこちに花咲きぬればさぎのあるそなれの松にみぞまがへけ
る (散木奇歌集 一〇九)

よるのこひ
波のよるいはねにたてるそなれ松まだねもいらず恋ひあかしつ
る (基俊集 七四)

顕季歌に見える「そなれ木」という語は、顕季が用いた他には『千載集』
八〇四番にあらわれるまで用例が見られないのであるが、この待賢門院
安芸の歌自体、詠歌内容からして顕季の歌を念頭に置いて詠まれたと思
われる。

では、「そなれ木」に類する語はあるのかと探っていくと、近い言葉

に「そなれ松」があった。この語は、『古今和歌六帖』四一一三番が現
存する最古の用例であるが、『基俊集』七四番において「よるのこひ」
の題で用いられるまで、恋歌に使用されることはなかった。ただし、語
それ自体の使用例が見られないわけではなく、「そなれ松」は『堀河百首』
を經由して後代に影響を与えた歌語の一つであるとの指摘もある¹⁴⁾。
『六条修理大夫集』に収録されている歌々はおおよそ年代順に配列され
ていると言われている¹⁵⁾が、ここで取り上げた一二三番は『堀河百首』
成立後の詠歌群中に位置しており、推定される詠作年次から「そなれ木」
は『堀河百首』で用いられた「そなれ松」から発想を得て創作されたと
も考えられる。

しかし、それよりも『梁塵秘抄』四六五番、あるいは『源氏釈』八一
番のほうが言葉続きや用法などに類似点が多い。この二首に見られる「み
なれぎ」は「みなれ木のみなれそなれて」と歌われていることから、「み
なれ木(＝水に漬かり慣れた木)」であり、さらには「そなれ木(＝風
に吹かれて這うような形になった木)」でもあった。一方、顕季の歌も、
波のかかる水際の「そなれ木」を詠んでいるので、先にあげた二首とよ
く似た「みなれそなれ」た状態の木を題材にしていると思われる。また、
顕季歌も『梁塵秘抄』『源氏釈』の歌もすべてが恋歌として詠まれている。
「いもとぬるよしもがな」という句の「ぬる」は、「波」や「岸」との縁
語関係にある「濡る」であると同時に、恋人と「寝る」という意味の掛
詞でもあり、「睦れ馴らひて」という今様の詞章と共通する内容となっ
ている。これらのことから、「そなれ木のみなれ」と詠んだ顕季は、今
様の制作年次という問題は残るものの、「みなれ木のみなれ」と歌った
今様と和歌から学んだ可能性を指摘してよいかと思う。

【例2】

むすぶ手に扇の風もわすられておぼろのし水涼しかりけり

(六条修理大夫集 二二四／堀河百首 泉 五五三 顕季)

松の木陰に立ち寄りて 岩もる水を掬ぶまに 扇の風も忘れ
て 夏なき年とぞ思ひぬる (梁塵秘抄 四三三)

河原院のいづみのもとにすずみ侍りて 惠慶法師

松影のいはるの水をむすびあげて夏なきとしと思ひけるかな

(拾遺和歌集 夏 一三二)

六月に岩もる清水むすばればあふぎの風を忘れまじやは

(堀河百首 泉 五二九 公実)

八重むぐらしげみが下にむすぶてふおぼろの清水夏もしられず

(堀河百首 泉 五三〇 匡房)

『堀河百首』泉題における顕季の詠は、『梁塵秘抄』四三三番と「扇の風も忘れられて」の句が一致するほか、清水を手に掬って涼をとるという発想自体も似ていることから、この今様に学んだと考えられる。

先にも述べたが、今様の多くは製作年代がはっきりしないため、和歌と今様のいずれが先に詠まれたのかその先後を決するのは難しい。しかし、この歌については顕季が先行する今様に学んだと言つてよいかと思う。

顕季と同じく泉の題で詠まれた公実歌は、「岩もる清水むすばれ」と「あふぎの風を忘れ」の部分について、今様の語彙そのままではないものの表現がよく重なっている。また、同様に泉題で匡房が詠んだ歌にも、顕季・公実と語彙や発想の近似が見られることから、これら『堀河百首』の泉の歌三首を繕り合わせて今様が作られたことを想定するよりは、すでにあった今様を元としてそれぞれの歌が詠み出されたとするほうが自然であろう。ところで、この『堀河百首』制作の背景には、共通の詠歌資料などを持って、出詠歌人らが相互に影響を与えあった「百首作歌研究会」

のような場があったであろうと言われている⁽¹⁶⁾。「泉」題三首における語彙の重なり具合からすると、その研究会において今様が共通の資料として用いられた可能性は低くない。

また、更にここでは「臈の清水」に関しても今様の影響を想定できるのではないかと思われる。

そよ 大原や臈の清水世にすまば またも逢ひみん面がはりす
な (梁塵秘抄 九)

世にすまば又も見にこむ大原やおぼろのし水おもがはりすな

(新撰朗詠集 水付漁夫 四七七 能宣)

おほはらやおぼろのし水よにすまばまたもあひみんおもがはり
すな (袖中抄 四一九)

「臈の清水」という歌枕は、管見によれば『新撰朗詠集』の大中臣能宣の歌が最も古い作例ということになる。これが今様として歌われるようになり、のちに『梁塵秘抄』九番となったものと思われる。『梁塵秘抄』九番は、「そよ」という囃し詞を除いた和歌の形で『袖中抄』に採録されてはいるが、『堀河百首』出詠の歌人らによつて用いられるまで「臈の清水」が和歌に用いられることはなく⁽¹⁷⁾、次にあげる『後拾遺集』の贈答歌が唯一の作例であった。

良暹法師大はらにこもりぬとききてつかはしける

素意法師

みくさゐしおぼろのしみづそこすみて心にかげはうかぶや
かへし 良暹法師

ほどへてや月もうかばんおほはらやおぼろのしみづすむなばか
りぞ (後拾遺和歌集 雑三 一〇三六・一〇三七)

しかし、素意と良暹の贈答歌の「隴の清水」は、大原という地の実景を意識したこと、「隴」と「月」とが縁語であったことから「隴の清水」が用いられたのであって、「泉」を主題とした歌として詠まれているわけではない。歌の内容自体も『堀河百首』の顕季・匡房の歌に重なるところはなく、そもそも「隴の清水」が夏の泉の涼しさを表現する際に用いられたのは顕季と匡房の二首のみで、これ以降も季節的な要素が歌語に持ちこまれることはほとんどなかった。新古今時代以降になって「隴の清水」はかなり用例を伸ばすが、『堀河百首』の歌々とは傾向を異にし、多くは『後拾遺集』の贈答歌を下敷きにして詠まれていた。

それでは何故ここで「隴の清水」という歌枕が選択されたのか。顕季・匡房の「泉」詠は、文字数さえ合えば他の泉であっても不自然のない内容である。それが「隴の清水」で歌われたのは、この歌枕が「謡いもの歌」に含まれるものと認識されていたためではないだろうか。おそらく「隴の清水」は『堀河百首』に見出されるまで、朗詠あるいは今様の場において「謡われる」歌でしかなく、勅撰集入集歌に用いられた語との認識は未だなかった。それゆえに、積極的な歌語の拡充をはかった『堀河百首』まで和歌には用いられずにいた。それが、先にあげた「百首作歌研究会」において、「泉」題の歌で今様の歌詞を用いようとしたときに、同じ謡いものとして浮かびあがってきたのではなからうか⁽¹⁸⁾。

【例3】

みねたかきこしの尾山に入る人は柴車にてくだるなりけり

(堀河百首 雑山 一三六五 顕季)

勝れて速きもの 鷓隼手なる鷹 瀧の水 山より落ち来る柴車

三所五所に申す (梁塵秘抄 三七四)

柴車おちくるほどにあし曳の山のたかさを空にしるかな

(堀河百首 雑山 一三六二 匡房)
やまちいづるしほのくるまに雪ふればはなのきつめるこちこ
そすれ (為忠家後度百首 車中雪 五五三 俊成)
あやぶまで嶺よりくだす柴車法に心やそみかくだなる
(久安百首 羈旅 一三九五 小大進)

ここで用いられている「柴車」は、和歌においては『堀河百首』の顕季・匡房詠が最も早く、これ以降、さほどの数はないが詠まれるようになってくる。植木朝子氏は『梁塵秘抄』と『堀河百首』とにあらわれる「柴車」について、どちらが先か製作年次の先後を明言できないとしつつも、初期にこの語を用いたのが、いずれも今様と関わりが見られる歌人であったことを指摘している⁽¹⁹⁾。したがって、この【例3】の歌に対し、顕季が今様から直接に「柴車」を取り入れたとまでは言えなくとも、歌謡と交流する語彙の土壤にあった言葉を用いたことは指摘してよからう。

【例4】

つとめてはまづぞながむるはちすばをつひはわがみのやどりとおも
へば (六条修理大夫集 蓮 一一二二)

極楽は遙けきほどと聞きしかど つとめて到る所なりけり

(梁塵秘抄 五六四)

極楽をねがひてよみ侍りける 仙慶法師

極楽ははるけきほどとききしかどつとめていたるところなりけり

(拾遺和歌集 哀傷 一三四三／千載和歌集 雑下 題しらす)

一一〇一 空也上人／袋草紙 二四四 千観内供)

さて、顕季の蓮の詠であるが、「勤行」の意味であれ「早朝」の意味であれ、「つとめて」という語が和歌に詠まれるのは顕季以前にはほとんど用例がない。『梁塵秘抄』五六四番の原拠である『拾遺集』一三四三番以外では、『道綱母集』一番に用いられるのみである⁽²⁰⁾。しかし、『道綱母集』の歌は『観普賢経』の「衆罪如霜露 惠日能消除」を詠じた歌であって、【例4】の顕季歌と内容的に重なるところはなく、顕季は「極楽ははるけきほどとききしかどつとめていたるところなりけり」という和歌（もしくは今様）から発想を得て詠んだと見てよいだろう。早朝の勤行に合わせるように花開く「はちすば」に極楽を見、そこが「ついは我が身のやどり」となるのだと詠むのは、極楽を「つとめて至る所なりけり」と詠んだ『拾遺集』の和歌（もしくは今様）がベースに置かれているためであろう。

ところで、この「極楽ははるけきほど」という歌は、『拾遺集』では仙慶法師の作となっているが、これ以降、『和漢朗詠集』では作者名が記されず、『千載集』では空也上人の作、『袋草紙』では千観内供の作とされ、作者にかなりの揺れが出ている。このことは、『千載集』や『袋草紙』が編まれた時代には『拾遺集』よりも『拾遺抄』が尊重されていたため、勅撰集入集歌としての認識はさほど強くなかったことを示すのではなからうか。この考えを補強しうる例として、次に寂念の歌をあげる。

ことごと云ふ歌うたひ念仏所にて夜もすがら歌うたひてきりじといふあさ経よみなせしを、伊賀入道聞きてきように入りて我が門といふ催馬楽うたひなどしてわすれがたくして思ひ給ふ事を、かどむかひとよみ侍りしことなどを思ひいでられるにや、のぼりて後入道のもとより歌三首をよみて遣したりける

行きやすくつとめてゐたる極楽のかどむかひこそ思ひでらるれ

（頼政集 六五三）

詞書から、寂念（伊賀入道）はことごと・きりじという遊女二人が念仏所で終夜、歌を歌い経を読んだのを非常に楽しみ、その夜の思ひ出を後に頼政へ詠み送ったのだと知れる。その歌のなかに「行きやすくつとめていたる極楽は」とあって、「極楽ははるけきほど」という歌との影響関係が感じられる。寂念歌が、遊女二人との交歓という今様の気分も濃厚な状況を思い起こして詠まれたという事情を考えるに、「極楽ははるけきほど」という歌は、ここにおいてもやはり勅撰集入集歌というよりは、『梁塵秘抄』に収められるような歌謡的な側面の強い歌として享受されていたと見てよいように思う⁽²¹⁾。

以上、だいぶ大掴みではあるが、顕季が和歌に用いた表現・発想と今様との近接、語の用法における歌謡的側面などについて確認してきた。顕季の和歌といえば、これまでは『万葉集』に特有の語彙を取り入れることが盛んであるというように万葉歌との繋がりを強調するような指摘が多かったのだが、一方で、今様のように流行の最先端とも言うべきものを取り入れていたことは注目されてよい。

ただし、和歌と今様との交流は顕季のみに見られるものではなく、先に【例2】・【例3】で論じたように、顕季に近い位置にいる歌人らにも同様の傾向が認められた。これはさらに言えば、今様好きが多数存在した白河院周辺の歌人⁽²²⁾全般に指摘できる傾向でもあった。

四．院政期和歌と今様——結びにかえて

本節ではまず、前節末尾で述べた白河院周辺の歌人と今様との影響関係について見ていく。

【例5】

冬は山伏修行せし 庵と頼めし木の葉も紅葉して 散り果てて 空
寂し 褥と思ひし苔にも初霜雪降り積みて 岩間に流れ来し水も
氷しにけり (梁塵秘抄 三〇五)

やまぶしのたのむこのもとしぐれしてなみだとまらぬふゆはき
にけり (為忠家初度百首 初冬時雨 四四五 源仲正)

和歌に「山伏」が詠まれることは、勅撰集でも三代集あたりから見られ、とりたてて珍しい歌材ではない⁽²³⁾。また、仲正歌の上句には本歌とも言えるような歌が『古今集』にある。

うりむゐんの木のかけにたたずみてよみける 僧正へんぜ
う

わび人のわきてたちよるこの本はたのむかけなくもみちちりけ
り (古今和歌集 秋歌下 二九二)

この遍昭の歌は、一見すると仲正歌の上句と内容的によく似ており、かつ『梁塵秘抄』三〇五番の前半部とも重なるように思われる。しかし、元々「侘び人」とは僧俗を問わず悲しみに沈んでいる人や望みの叶わぬ傷心の人を指す言葉であった。この遍昭歌の場合、作者が僧侶であることから「侘び人」に俗世を離れた修行者のイメージを負わせる注釈書もある⁽²⁴⁾が、秋の部に入れられていることや素直に読み下したときに閑寂とした秋の景色を詠んだ叙景歌とすることも可能な内容であることから、そこまで踏み込んだ解釈をせずともよいかと思う。また、「侘び人」に「俗世を離れた隠遁者の形象」⁽²⁵⁾が明確に込められるようになったのが平安後期以降であったことを思えば、仲正歌は遍昭歌との間に直接的な影響関係を見るよりも、むしろ使用語彙の近しさからすれば今様と

のほうが近い。

源仲正は今様をふまえて和歌を詠んだ可能性が指摘されている歌人である⁽²⁶⁾。仲正がそのような歌人であれば、【例5】の歌に關しても、すでにあつた今様から直接自詠の発想を得たと見てよいのではなからうか。

もちろん今様の成立年代が不明であることを考えれば、仲正歌から三〇五番の今様が生まれたことも考えられなくはない。しかし、仲正歌とほぼ同時代に詠まれた歌で、やはり『梁塵秘抄』三〇五番の詞章と句が似ている歌として次の二首がある。

さむさに人わろくおもひてこもりゐて侍りしに、木ずゑさ
びしくなりて侍りしかば

やまおろしの身にしむかぜのけはしさにたのむこのはもちりは
てにけり (行尊大僧正集 六)

むらどりのたのむこのはもちりはててそらにわかるること

そすれ (江帥集 一八四)

「たのむこのはもちりはて」という句は、なんら特殊な歌語を含むものではないが、管見によれば、これに類似する句はこれ以前の和歌には見られず、以降にもほとんど作例が見られない⁽²⁷⁾。行尊と匡房の歌については、いずれか一方がもう一方の詠歌に影響を受けて詠まれた可能性は高いが、少なくともどちらか一首は今様の詞章に近い句を自らの考えによって詠み出したと言える。この二首はいずれも人口に膾炙した秀歌とは言い難く、ここで用いられた句がわざわざ今様に転用されたとするよりは、やはり既存の今様を用いてこれらの歌が詠まれたとするほうが理解しやすいように思うのである。

【例6】

心の澄むものは 秋は山田の庵ごとに 鹿驚かすてふ引板の声 衣
しで打つ槌の音 (梁塵秘抄 三三三)

あしひきの山だのひたのひたぶるにわするる人をおどろかすか
な (古今和歌六帖 おどろかす 二八八六)

今様に「心澄むもの」として取り上げられている引板の音と砧の音は、
いずれも和歌の素材として珍しいものではない。ここで取り上げる「引
板」も古くは右にあげたように『古今和歌六帖』あたりから作例が見ら
れる。しかし、引板と鹿とが詠み合わせられた作品が現れはじめるのは、
これよりも大分下り、続いてあげる数首が初期の例⁽²⁸⁾のおおよそとな
る。

田上にて山田の方にしかおどろかすおとにめをさましてよ
める

さ夜ふけて山田のひたのこゑきけば鹿ならぬ身もおどろかれけ
り (散木奇歌集 四四一)

かきひたし

を山だにしかこそきぬれもはがきひたしかけねばおともかく
れず (二条太皇太后宮大弐集 これはかくしだい 一九五)
ひたぶるに山田の中に家ゐしてすだくをしかをおどろかすかな

(堀河百首 田家 一五一六 永縁)

田家霧

あさぎりにしづのかとたをわけゆけばひとをもしかとひたなら
すなり (為忠家初度百首 田家霧 三八一 顕広)

このように、初期には、宮廷で今様が盛んになる時期の歌人らによつ

て引板と鹿との取り合わせがなされているのではあるが、これらの歌々
の発想源を即座に今様と結びつけることはし難い。

九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにたゞにやはおほ
ゆる。山風にたへぬ木、の梢も峰の葛葉も、心あはた、しうあらそ
ひ散るまぎれに、たうとき読経の声かすかに、念仏などの声ばかり
して、人のけはひいと少なう、木枯らしの吹き払ひたるに、鹿はたゞ
まがきのもとにたゞずみつ、山田の引板にもおどろかず、色濃き
稲どもの中にまじりてうち鳴くも、愁へ顔なり。

(源氏物語 夕霧)⁽²⁹⁾

『源氏物語』夕霧卷には波線部のような表現があり、あるいは歌人ら
はこの『源氏物語』の本文をとつて歌を詠んだことも想定しうる。俊頼
については、実際に幾つかの歌について『源氏物語』の本文を用いて歌
を詠んでいたようだとの指摘が岡崎真紀子氏にある⁽³⁰⁾。その享受の仕
方は、明石・須磨巻以外では内容は取り入れず「個々のことばや部分的
な語句の照応」にとどまるとされているのだが、「山風に堪へぬ木々の
梢も、峰の葛葉も、心あわたたしう争ひ散る」と表現されるような一種
騒然とした場面から取り出された言葉によつて俊頼歌が詠まれたなら
ば、それはまさに指摘にある享受方法に合致すると言えよう。

しかし、引板と鹿とを取り合わせた歌々が院政期の歌人らによつて同
時多発的に詠まれ出したことも、やはり見過ごしにはできない。俊頼歌
は『源氏物語』との関係から詠み出されたのだと解釈できたとしても、
この頃には物語の本文をとつて歌を詠むことは一般的な方法とはなつて
いなかった。そのことを思えば、俊頼以外の歌人の歌にまで源氏享受を
当てはめることは難しい。あるいは、俊頼歌から学んで他の歌々が詠ま
れた可能性も考えられなくはない。しかし、俊頼歌は詞書が確かならば

田上の別業において詠まれたごく私的な詠であつて、とりたてて秀歌とも思えない田舎の一齣を詠んだ歌が、他歌人詠に影響を与えたかどうかは疑わしい。このように考えるならば、引板と鹿とを取り合わせた歌の発想の源は『源氏物語』や俊頼歌以外に求められるべきであり、それらの代わりとして『梁塵秘抄』三三二番の今様が存在した可能性を見てもよいのではなからうか。

また、少し時代は下るが、院政期の歌合において今様の利用を指摘した判詞も書かれている。

二番 左持 三郎君

秋のよの月のひかりはかはらねどたびのそらこそあはれなりけれ

右 牛君

あきの夜はたのむる人もなきやどもありあけの月はなほぞまちいつる

左歌、いひなれたる様に侍り。雑芸にうたふ歌にこそ頗似て侍な□□^れ。右歌、「なきやども」といへる、いみじうとど

こほりたれど、歌の品の同じ程度に侍れば、持とや申すべからむ。(権僧正永縁花林院歌合 三二・三二 基俊判)⁽³¹⁾

「権僧正永縁花林院歌合」は天治元年(一一二四)に永縁によって催行された歌合である。ここで判者である基俊は、左歌を指して「雑芸にうたふ歌」によく似ていと述べている。しかし、現存する今様のなかに左歌に影響を与えたと言いきそうなものはない。適合する今様がすでに失われてしまったためとも思われるが、左歌の下旬に近似する「こそあはれなれ」という句の形は今様においてしばしば見られるものであつた⁽³²⁾。

われらは何して老いぬらん 思へばいとこそあはれなれ 今は西方極楽の 弥陀の誓ひを念ずべし (梁塵秘抄 一三五)

右の今様以外にも「こそあはれなれ」と歌う今様は『梁塵秘抄』のなかに幾つも存在し、おそらく基俊はなにか特定の今様を前提として判詞を書いたと言うよりは、このような句の形を今樣的だと指摘したのである。基俊が判詞のなかで今様について述べたのはこの一回のみであるが、このことは、俊頼に比べて保守的であると言われてきた歌人までもが判詞で言及するほど、今様が和歌と近いところにあつたことの現れではなかつたかと思う。

前代まで、今様は公任や赤染衛門など著名歌人らの秀歌を中心に和歌を吸収する一方であつた。しかし、本稿で取り上げた頭季らが活躍する白河院政期には宮廷社会に今様が広く入り込み、元々の歌い手である遊女ばかりか、貴族も自ら今様を歌うようになっていた。このように貴族自身が演じ手となって繰り返し歌つたことで、今様は一般的な教養に近接する領域の事象として彼らの思考に定着することになり、本稿で例に挙げた歌々がそうであつたように、やがては和歌を詠むときの発想の源泉となつていったと思われる。これを証明するように、今様に異様なまでの情熱を注ぐ帝王・後白河院が君臨する時代の歌壇では、今様との影響関係を想定される歌がさらに増加していく。以下については稿を改めて論じる予定であるが、たとえば古典主義者的色合いの強い俊成においても今様に想を得たと思われる歌が見られる他、同時期の歌人らの詠にも同様の跡は多数存在した⁽³³⁾。そしてその傾向は、後鳥羽院歌壇の盛儀であつた『千五百番歌合』の判詞や歌に今様がさまざま用いられたように⁽³⁴⁾、新古今歌人にまで脈々と続いていくのである。

これまで和歌と今様の影響関係というと、歌人や特定の歌語との関わりといった個別のテーマに関連して論じられることが多く、和歌史の主

流とは些か離れたところに定置されてきたように思う。しかし、今様の爛熟期に歩みを揃えるように和歌と今様との影響関係が濃度を増していく傾向にあったことを考えると、それと踵を接する時期に到来する新古今歌風と今様との関係について、和歌史の流れにおいてどのような場所に置かれるべきであるか改めて検証し直す必要を感じる。ささやかではあるが、本稿をそこへ至る道筋の足掛かりとしたい。

注

- (1) 顕季の伝記については、井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』（笠間書院 昭和六十三年十月）、川上新一郎「藤原顕季伝の考察」（『国語と国文学』54・2 昭和五十二年八月）などに詳しい。
- (2) 以下、『梁塵秘抄』は新編日本古典文学全集に拠る。
- (3) 菅野扶美「顕季、ひつめにて」考―『梁塵秘抄口伝集』巻十「古川」をめぐって（『梁塵研究と資料』12 平成元年十二月）
- (4) 沖本幸子「今様の時代―変容する宮廷芸能―」（東京大学出版会 平成十八年二月）、植木朝子「歌い女の主たち―『梁塵秘抄口伝集』巻十から」（『国文』95 平成十三年八月）
- (5) 植木朝子『梁塵秘抄とその周縁 今様と和歌・説話・物語の交流』（三省堂 平成十三年五月）、小野恭靖「今様と和歌―『梁塵秘抄』所収歌を中心として」（『王朝文学資料と論考』笠間書院 平成四年八月）、小川寿子「俊頼と今様」（『国語と国文学』59・6 昭和五十七年六月）
- (6) 戸谷三都江「六条顕季の歌その一―堀河百首を中心に―」（『学苑』238 昭和三十五年一月）、竹下豊「藤原顕季の和歌」（『和歌文学の伝統』角川書店 平成九年八月）
- (7) 以下、和歌は特別の断りがない限り『新編国歌大観』に拠る。
- (8) 小川寿子「俊頼と今様」（『国語と国文学』59・6 昭和五十七年六月）
- (9) 『梁塵秘抄』四三〇番の「しづく山」について、諸注釈書は次のように解している。
「未詳。「しづく山」として『能因歌枕』に見える常陸国（茨城県）のそれをあげる説もある。」（新日本古典文学全集）
- (10) 拙稿を参照。
- (11) 以下にあげたもの他にも、「花の都」を用いた歌は様々にみられる。長楽寺にはべりけるころ、齋院より山ざとのさくらはいかかとありければよみ侍ける 上東門院中将
にほふらはなのみやこのこひしくてをるにもうき山ざくらかな
みなかに侍けるころつかさめしをおもひやりて 源重之
はるごとにわすられにけるむもれぎは花のみやこをおもひこそやれ
よのなかさわがしうはべりける時さとのとね宣言にてまつりつかうまつるべきを、うたふたつなんいるべきといひ侍ければよみはべりける 藤原長能
しろたへのとよみてぐらをとりもちていはひぞそむるむらさきのに
ちはやぶる神無月こそかなしけれたれをこふとか常に時雨るる
（後拾遺和歌集 雑六神祇 一一六四）
（古今和歌六帖 かみな月 二二一 つらゆき）
天曆御時に、一条撰政藏人頭にてさぶらひけるときに、帯をかくてごをあそばしけるにまけたてまつりはべりて、おほんかずおほくなりければ、帯かへしたまふとて 御製
しらなみのうちやかかへすとおもふまにはまのまさこのかずまされ
をとこの女のふみをかくしけるを見て、もとのめのかきつけ侍りける 四条御息所女
- (12) 以下にあげたもの他にも、「花の都」を用いた歌は様々にみられる。長楽寺にはべりけるころ、齋院より山ざとのさくらはいかかとありければよみ侍ける 上東門院中将
にほふらはなのみやこのこひしくてをるにもうき山ざくらかな
みなかに侍けるころつかさめしをおもひやりて 源重之
はるごとにわすられにけるむもれぎは花のみやこをおもひこそやれ
よのなかさわがしうはべりける時さとのとね宣言にてまつりつかうまつるべきを、うたふたつなんいるべきといひ侍ければよみはべりける 藤原長能
しろたへのとよみてぐらをとりもちていはひぞそむるむらさきのに
ちはやぶる神無月こそかなしけれたれをこふとか常に時雨るる
（後拾遺和歌集 雑六神祇 一一六四）
（古今和歌六帖 かみな月 二二一 つらゆき）
天曆御時に、一条撰政藏人頭にてさぶらひけるときに、帯をかくてごをあそばしけるにまけたてまつりはべりて、おほんかずおほくなりければ、帯かへしたまふとて 御製
しらなみのうちやかかへすとおもふまにはまのまさこのかずまされ
をとこの女のふみをかくしけるを見て、もとのめのかきつけ侍りける 四条御息所女

へだてける人の心のうきはしをあやふきまでもふみみつるかな

(後撰和歌集 雑一 一一二二)

古くに「うきはし」が詠まれる場合、現存する歌のほとんどが「ふみ」と詠み合わせられていて、この後撰集歌の他に『朝光集』一番、『赤染衛門集』二二三番に作例がある。いずれも文を媒介として相手の浮気心を憂きものとして詠んでいるのだが、おそらく頭季の消息にある「うきはしのおろかなるさま」も、なかなか消息をよこさなかった俊頼に対し、恋歌を引いて恨み言を述べたものであろう。

(14) 竹下豊『堀河院御時百首の研究』(笠間書院 平成十六年五月)

(1) 井上・川上論文、(6) 戸谷論文を参照。一二三番歌の前後で詠作年次が推定しうるものをあげると、一一五・一一六は嘉承元年(一一〇六)、一三一・一三二は永久二年(一一一四)と考えられるので、かなり幅はあるが一二三番歌は嘉承元年〜永久二年の間に詠まれた蓋然性が高い。

(16) (14) 竹下単行書を参照。

(17) 『堀河百首』との前後関係は判然としないが、『江帥集』に次の作例がある。

鳥羽院大井がはの遊宴

冬くればふるさとさびしおほはらやおぼろのしみづさえやまさらん

(江帥集 一一五)

(18) 『堀河百首』とはほぼ同時代に詠まれた源俊頼の歌においては、「わが恋はおほろのしみづいはこえてせきやるかたもなくくらしつ」(『右兵衛督家歌合』寄泉恋 二一九)と恋歌のなかに「朧の清水」が詠まれている。今様との関わりが深い俊頼であれば、「大原や朧の清水世にすまば」の歌は、「水付漁夫」に区分される『新撰朗詠集』の歌というよりは、男女の惜別の情を感じさせる今様として認識していたと考えるほうがより自然であろう。この俊頼と、頭季・匡房らの交流から考えても、「朧の清水」は謠いものの歌詞として認識されていた可能性は高いと思われる。

(19) (5) 植木単行書を参照。

(20) 仏名のあしたに、ゆきのふりければ

としのうちのつみけつにはにふるゆきのつとめてのよはつもらざらなん

(道綱母集 一)

(21) 源頭兼(一一六〇〜一二二五)によって編纂された『古事談』(本文は新日本古典文学大系『古事談 続古事談』に拠る。)の巻第三

僧行には、「十萬億ノ国々ハ、海山隔テ遠ケレト、心ノ道タニナヲケレハ、ツトメテイタルトコソキケ」という今様を金峯山の巫女が歌占に用いたことが記されている。説話中に恵心僧都の名前が出てくるのは仮託であった可能性も否定できず、この「つとめて到る」という句を用いた今様の成立期を恵心僧都の頃としてよいかには疑問が残る。だが、少なくとも『古事談』が編纂された時代までには、『梁塵秘抄』五六四番と内容の面からも極めて近似する類歌が作られ、それを用いた説話が流布していたとは言えよう。類歌の成立時期は不明であるが、「つとめて到る」という表現が院政期以降、今様に近接したところに息づいていたことを指摘しておきたい。

(22)

(4) 沖本単行書、(8) 小川論文、小川寿子「後白河院の「今様熱」と待賢門院璋子——院の生いたちと『梁塵秘抄』への投影から」(『中世文学論叢』三号 昭和五十五年一月)、同「後白河院の「今様熱」と待賢門院璋子——女院院司と今様」(『日本歌謡研究』十九号 昭和五十五年四月)を参照。

(23)

勅撰集で「山伏」を用いた早期の例としては、次のような歌々がある。法皇てらめぐりしたまひけるみちにて、かへでのえだををりて

素性法師

このみゆきちとせかへでも見てしかなかる山ぶし時にあふべく

(後撰和歌集 雑一 一〇九二)

やまぶしものぶしもかくて心みつ今はとねりのねやぞゆかしき

(拾遺和歌集 雑下 返し 五二九 健守法師)

(24) 窪田章一郎氏は角川古典文庫『古今和歌集』(角川書店 昭和四十八年一月)の当該歌の脚注において「世捨人が樹下石上を宿とする修行生活を背後においた即興歌であろう」としている。一方、片桐洋一氏は『歌枕歌ことば辞典増訂版』(笠間書院 平成二年六月)の「侘人」の項で、初句二句を「世に住みわびた私が特別に目をつけて立ち寄る」と現代語訳し、ここでの「侘び人」を「望むことが入れられず失意の底にある人」を指すとしているように、「侘び人」の解釈は統一されていない。

(25) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 平成

十一年五月)の中村文氏による「侘び人」の項を参照。

(26) 植木朝子氏は「源伸正と今様」(『国語と国文学』78、4 平成十三年四月)において、伸正詠と今様の影響関係については伸正詠が先行している場合と今様が先行している場合の両論を提出し、さらには両者に直接の関係がない場合にまで言及するというようにきわめて慎重な姿勢をとっている。だが、その場合でも「和歌と今様の連続した発想基盤には注意を払っておくべき」であるとしている。

(27) 「頼む木の葉」という句の類例を探しても、合致するものは俊恵の一首のみである。

行路のしぐれ頼政家会

おもはずに時雨は過ぎぬ木陰とて頼むこのはぞ降りもをやまぬ

(林葉和歌集 五八二)

「たのむこのもと」とすると、早期の用例として兼盛の歌があるが、こちらは夏歌であり、かつ恋の歌の様相をも呈しているので、内容的に先行歌とは言い難い。

さ月のころものいひたりしに、なにかはといひたりしに、たのみてさもあらずなりければ、うらみて雨ふりぬべかりける日
天の原くもればかなし人しれずたのむ木のもと雨ふりしより

(兼盛集 夏七)

(28) 本文中に上げた他に、次の用例もある。

けふよりはそともひたにてもふれじまくらにしかのこゑもきくかな
な

(忠盛集 四二)

秋歌とてよめる

あきのよはやまだのひたのおとにこそしかならぬ身もおどろかれけれ

(教長集 五一三)

田家

ことこの北政所よりよみてまゐらせよとおほせられしかば

(重家集 三七五)

また、『家持集』にも引板と鹿とを詠んだ例はあるが、この集の成立自体がかなり下ると云われるものであり、『家持集』の作品をして早期の作例というのは難しいが、参考までにあげておく。

山だもるたもりのひたのころにてこひするしかのこゑぞとめつる

(家持集 二五〇)

(29) 新日本古典文学大系『源氏物語』(四)に拠る。

(30) 岡崎真紀子「源氏物語」と源俊頼(『やまとことば表現論 源俊頼へ』笠間書院 平成二十年十一月)

(31) 萩谷村『平安朝歌合大成増補新訂』三卷(同朋舎出版 平成八年二月)に拠る。

(32) 高木豊『平安時代法華仏教史研究』(平楽寺書店、昭和四十八年六月)に「こそあはれなれ」の用例その他について詳述されている。

(33) 俊成の和歌に今様と同型の発想や表現技法があることは、新聞進一「今様」に見る仏教」(『仏教文学研究』法蔵館 昭和三十九年二月)、菅野扶美「天台五時教の今様と『久安百首』俊成詠について」(『梁塵 研究と資料』第十四号 平成八年十二月)に指摘があるが、これについては稿者も「藤原俊成の和歌と今様」と題して平成二十一年中世文学会秋季大会において研究発表を行う予定である。

(5) 植木単行書、植木朝子「源三位頼政と今様」(『国語国文』73、1 平成十六年一月)、小島裕子「西行の和歌に見る歌謡的世界」『山家集』「朝日まつ程は闇に迷はまし」の歌から」(『和歌文学研究』67 平成六年一月)などがある。

(34) 新聞進一「千五百番歌合」と今様」(『解釈』22、6 昭和五十一年六月)

Fujiwara no Akisue's Waka Poems and Imayo

ONO, Junko

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies, Department of Japanese Literature

Fujiwara no Akisue (1055–1123) is well known as an ancestor of Rokujo-touke and a founder of Hitomaro-eigu. It is easy to understand that he was a leader of the poetry circles during this period, as he attended many poetry parties such as “Horikawa-hyakushu” and acted as a judge of many poetry contests since the Eikyu period.

Aside from playing an important role as a poet, he was also a close vassal of the ex-Emperor Shirakawa-in, because Shinshi, his mother, was the ex-Emperor's nurse.

Imayo was one of the entertainments held around Shirakawa-in during this period. It is not documented whether or not Akisue himself sung Imayo, but it is supposed that he participated in the world of yujo (prostitutes) and Imayo, at least as a patron, due to the fact that his name was found written in “Ryojinhisho-kudenshu”.

Dr. Muneo Inoue points out that Akisue was good at other entertainments in addition to Waka, and was interested in teaching them to his children. He must have had above-average knowledge of Imayo, which was fashionable around Shirakawa-in, in order to have taught it to his children.

With these preconditions in mind, I would like to study how Akisue was influenced by Imayo to make waka poems by focusing on the relationship between his waka poems and Imayo, which has not previously been explored in great detail.

Key words: Fujiwara no Akisue, Imayo, Ryojinhisho, waka poems, Shirakawa-in